



敦盛あつもりの最期さいご

平家物語へいけ

目標

- 歴史的仮名遣いに注意し、文章の特徴とくちゆうを生かして朗読し、物語に親しむ。
- 登場人物の言動や心情について話し合い、作品の理解を深める。

『平家物語』では、平安時代末期に栄華を極めた平家一門の没落ぼつらくが、「諸行無常しよぎやうむじやう」という仏教思想を背景に語られています。次の文章は、この物語の初めの部分です。

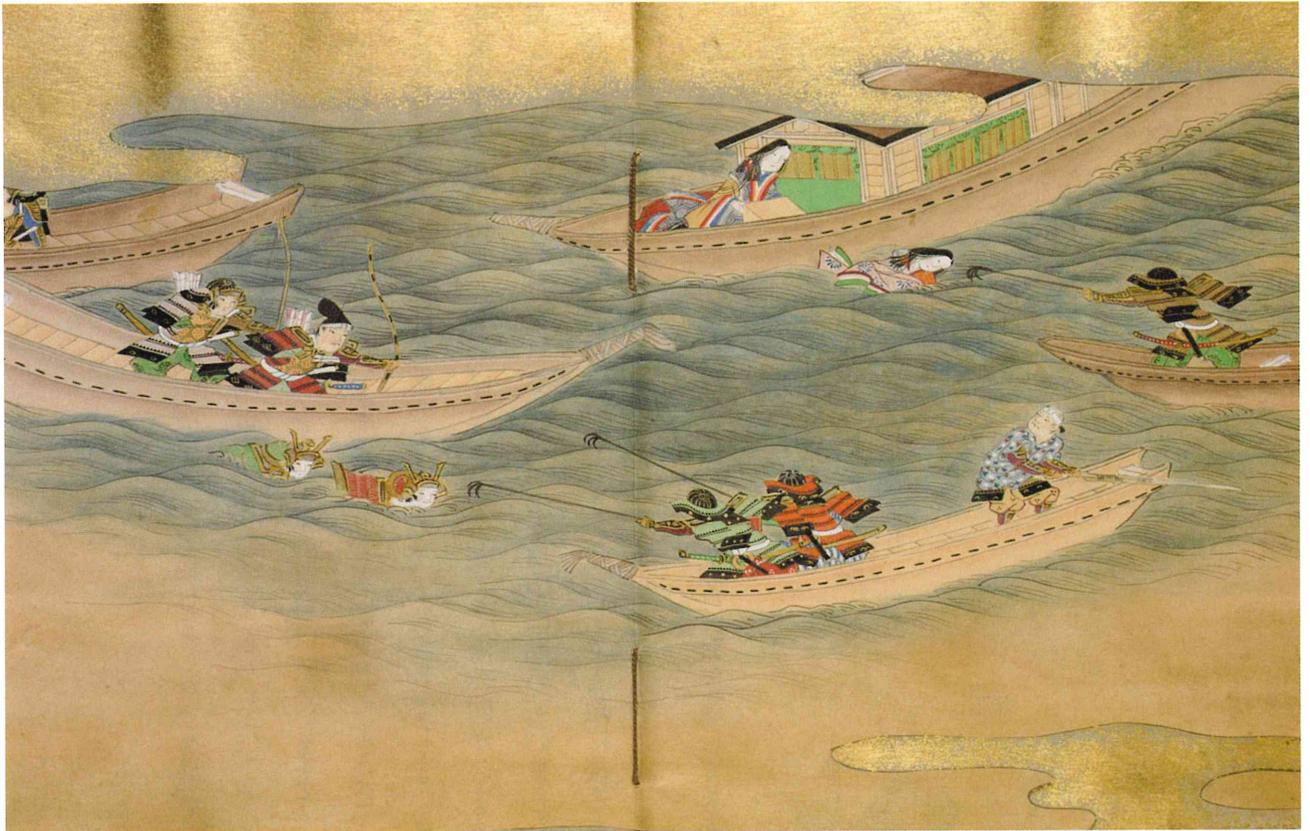
祇園(チ) (シヨウジャ)精舎(シヤ) (フウジ)の鐘(カネ)の聲(コゑ)、諸行(シヨギヤウ)無常(ムジヤウ)の響(ヒび)き
あり。沙羅(サ)双樹(フウジ)の花(ハナ)の色(イロ)、盛者(シヨウシャ)必衰(ヒツス)の
理(ことわり)をあらはす。おごれる人も久しからず、
ただ春(はる)の夜(よ)の夢(ゆめ)のごとし。たけき者(たけき)もつ
ひには滅(ほろ)びぬ、ひとへに風(かぜ)の前(まへ)の塵(ちり)に同
じ。

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。沙羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。おごりたかぶっている人も長くは続かない、(それは)まるで春の夜の夢のようだ。力の強い者もいつかは滅びてしまふ、(それは)全く風の前塵と同じだ。

平家物語 鎌倉時代の軍記物語。作者は未詳。『徒然草』によれば、信濃前司行長が琵琶法師の生仏に語らせたのが起こりであるという。激しい合戦を軸に平家の優美な生活も描かれ、場面ごとにさまざまな人間像や思いを読み取ることができる。

▼ 没 諸行無常 万物は常に移り変わって、不変なものはないこと。





壇の浦の戦いで、海に入った平家方を源氏方が熊手で引き上げている。（『平家物語』絵本）



直美の像（埼玉県熊谷市）



琵琶法師が琵琶の旋律にのせて語った。（『太平記絵巻』）

▼ 減 衰 双

という。
沙羅双樹 インド原産の常緑高木。釈迦が没した時、床の四方に二本ずつあったこの木が互いに結ばれ、白色に変わったという。

▼ 鐘

た寺。
祇園精舎 昔、インドで釈迦のために建てられた寺。

（124ページ）

平家打倒のため、源頼朝が東国で挙兵しました。各地で反平家の動きが起こる中、平清盛は病死します。源義仲の軍によって京を追われた平家は、一の谷に陣を構えました。しかし、源義経の奇襲に遭って、平家の軍勢は敗走します。

源氏方の武将である熊谷次郎直実は、手柄を立てようと、息子小次郎とともに、敵の陣に攻め込みますが、小次郎が敵の矢に当たって負傷してしまいます。武功にはやる直実は、翌日、平家の人々が舟に乗って逃げることを予想して海へ向かいます。直実が海岸に着くと、立派な身なりの武者が沖の舟を目ざして、馬を海中に進めていました。

「身分の高い大將軍とお見受けいたす。見苦しくも敵に後ろをお見せになるものだ。お引き返しなさい。」

直実がこのように呼びかけると、その武者は引き返してきました。

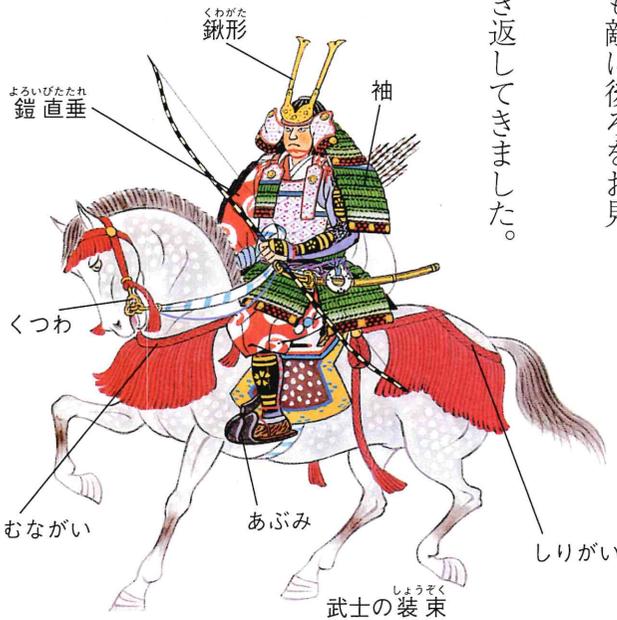
汀にうち上がらんとするところ、波打ちぎわに上がろうとするところ

ろに、おし並べておぼすと組んで

どうど落ち、とつて押さへて首

をかかんと甲をおしあふのけて

見ければ、年十六七ばかりなるが、



武士の装束

源頼朝 一一四七—一一九九 平家を倒し、鎌倉に幕府を開いた。

平清盛 一一一八—一一八二 平家一門の栄華を築いた。

源義仲 (木曾義仲) 一一五四—一一八四 平家を破り京に入ったが、横暴ぶりが不評を買い、義経に討たれる。

京 現在の京都府京都市。

一の谷 現在の兵庫県神戸市須磨区にある。

陣

源義経 一一五九—一一八九 頼朝の弟。平家滅亡に功があった。

＊(アオ)でもよい。



薄化粧うすげしやうして、かねぐるなり。わが子の小次郎こじらうがよはひほどにて、容顔まことに

美麗なりければ、いづくに刀を立つべしもおぼえず。
歯を黒く染めている
どこに
突き刺したらよいかわからない

「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名のらせたまへ。
いったいどういふ身分のおかたでいらつしやいますか
お名のりください
助けまゐらせ

ん。」

と申せば、

「なんぢは誰たぞ。」
おまえは誰か

と問いひたまふ。
おたすねになる

「物その者ソウラウで候はねども、武蔵むさしの国の住人、熊谷くまがへ次郎じらう直実なほさね。」
名のるほどの者ではありませんが

と名のり申す。

「さては、なんぢシにあうては名のるまじいぞ。なんぢシがためにはよい敵かたきぞ。
では
向かつては名のるまいぞ
にとつては

名のらずとも首をとつて人に問へ。
(自分を)見知っているであろう
見知らうずるぞ。」

とぞのたまひける。
おっしやった

薄化粧 この当時の貴族のたしなみである。

▼粧

かねぐる おはぐるで、歯を黒く染めること。

* (マウ) でもよい。

武蔵の国 現在の東京都・埼玉県・神奈川県の一部。

熊谷、「あつぱれ、大將軍や。この人一人討ちたてまつたりとも、負くべき
ああ 立派な將軍だ お討ち申したとしても 負けるはずの

いくさに勝つべきやうもなし。また討ちたてまつらずとも、勝つべきいくさに
いくさに勝つわけでもない

負けることもよもあらじ。小次郎が薄手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ
負けることも まさかあるまい 軽い傷を負ったのさえ つらく思うのに

思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆きたまはんずらん。
思ふに この殿の父 討たれぬと聞いて いかばかりか 嘆きたまはんずらん

あはれ助けたてまつらばや。」と思ひて、後ろをきつと見ければ、土肥、梶原
あはれ助けたてまつらばや と思ひて 後ろをきつと見ければ 土肥 梶原

五十騎ばかりで続いたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、
五十騎 ばかりで続いたり 熊谷涙をおさへて 申しけるは

「助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞のごとく候ふ。よも逃
助けまゐらせんとは存じ候へども 味方の軍兵 雲霞のごとく候ふ よも逃

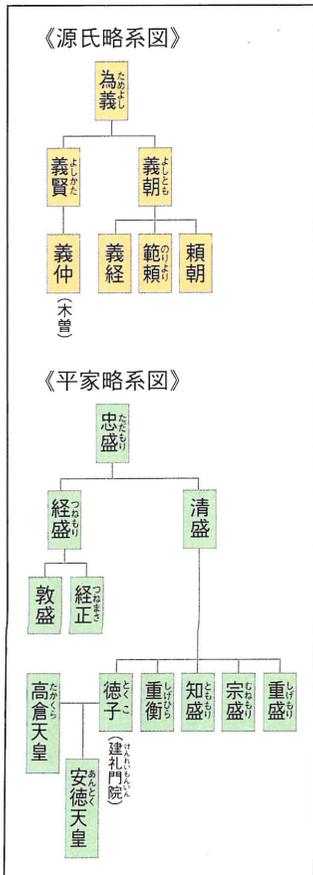
れさせたまはじ。人手にかけまゐらせんより、同じくは、直実が手にかける
れさせたまはじ 人手にかけまゐらせんより 同じくは 直実が手にかける

らせて、後の御孝養をこそつかまつり
らせて 後の御孝養をこそつかまつり

候はめ。」
候はめ

と申しければ、

「ただとくとくとく首をとれ。」
早く早く

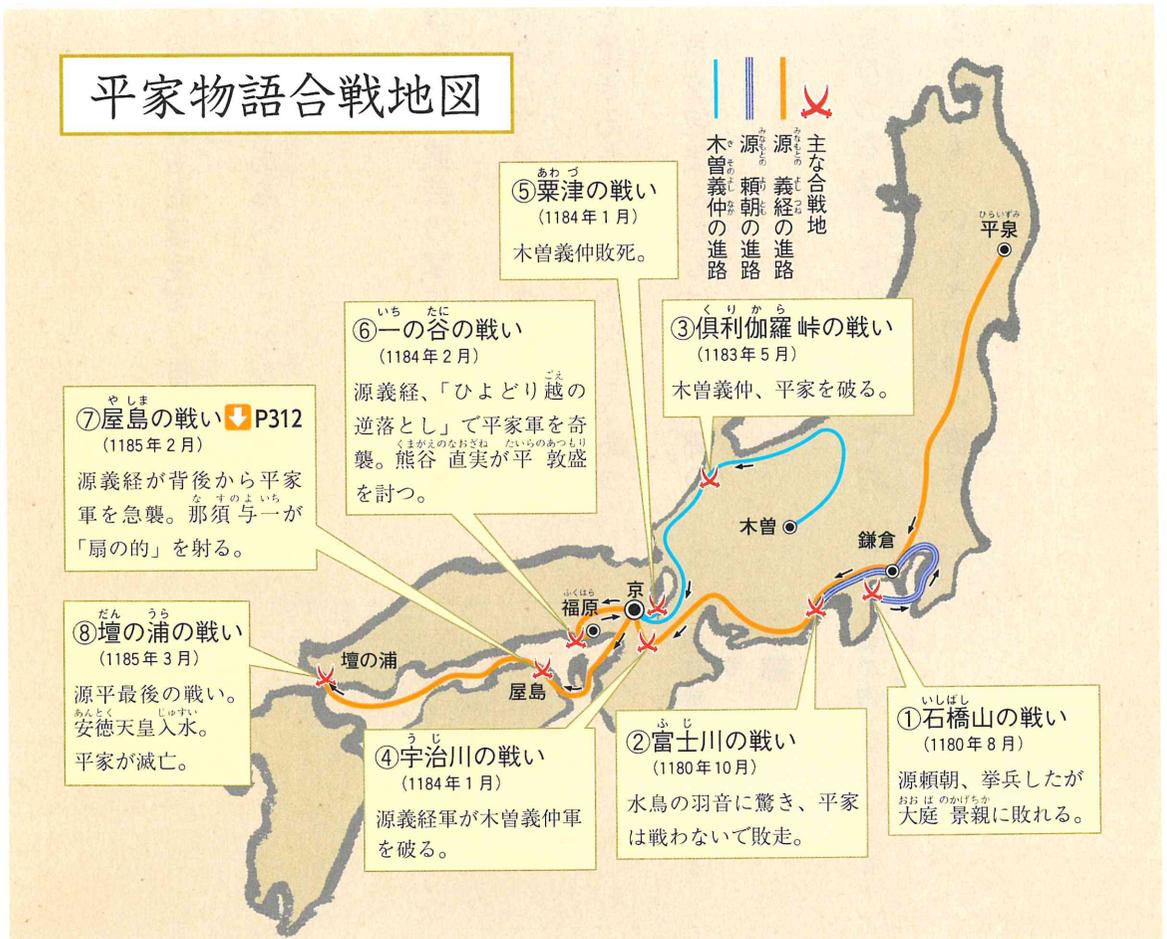


5

土肥、梶原 源氏の武
 将。土肥実平と梶原景時。
 ▼ 騎
 雲霞のごとく 大勢の
 人が群がっている様子。
 孝養 供養のこと。仏
 や死者の霊に対して、お
 供えをしたりお経を讀ん
 だりして、慰めること。



敦盛と直実（一の谷の合戦 屏風絵）



とぞのたまひける。

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしともおぼえず、目もくれ

心も消えはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべきことならねば、

泣く泣く首をぞかいてんげる。

「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、

何とてかかると憂きめをばみるべき。情けなうも討ちたてまつるものかな。」

とかきくどぎ、袖を顔に押しあててさめざめとぞ泣きゐたる。やや久しうあつ

て、さてもあるべきならねば、鎧直垂をとつて、首を包まんとしけるに、錦の

袋に入れたる笛をぞ、腰にさされたる。

「あないとほし、この暁城の内にて管絃したまひつるは、この人々にてお

はしけり。当時味方に、東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛持

つ人はよもあらじ。上臈は、なほもやさしかりけり。」

▼ 鎧直垂 鎧の下に着る
衣装。

▼ 錦

城の内 城は、一の谷
の平家の城（陣）。

とて、^(口ウ)九郎御曹司^(シウ)の見参^(げんざん)に入れたりければ、これを見る人、^(ウ)涙を流さずといふ
と云って九郎御曹司義経に(首とともに笛をお見せ申したところ
^{みな涙を流さない}

ことなし。

後に^(シユ)聞けば、修理大夫^(しゆり)経盛の子息に大夫敦盛とて、^(シヨウ)生年十七にぞなられけ
^{聞いて}

る。それよりしてこそ熊谷が^(ウ)発心の思ひはすすみけれ。
^{(まぎに)その時から} ^{ますます強くなった}



昭和時代に敦盛をイメージして描かれた絵(『敦盛』菊池契月)

平家は一の谷の敗戦の後、四国の屋島^(やしま)に逃れていきました。義経は、一年ほどかけて水軍を
整え、平家を背後から急襲し、瀬戸内海に追いやることにあります。そして、およそ一か月の
後、壇の浦^(だんうら)で最後の決戦を行い、平家は敗れ、幼い安徳天皇とともに、主だった武将は海中深
く沈みます。それは、元暦二(一一八五)年三月二十四日のことで、平清盛が太政大臣に任
ぜられてから十八年後のことでした。

5

修理大夫 修理とは皇居の造営や修理を行う役所。大夫はその長官。
経盛 平清盛の弟、平経盛。その子敦盛は笛の名手。
発心 仏門に入り、僧になること。

屋島 香川県高松市にある。
壇の浦 山口県下関市にある。

《出典》『新編日本古典文学全集』45・46 平家物語
①・② によった。

千 みちしるべ

内容を捉えよう

1 歴史的仮名遣いに注意して、音読しよう。

読み深めよう

2 登場人物の言動から、それぞれの心情について考えよう。

(1) 大將軍を押しさえつけた直実が、一転して「助けまゐらせん。」(P 127 L 3)と言った時の心情を考えよう。

(2) 大將軍が、「なんぢにあうては名のるまじいぞ。」(P 127 L 10)と言った時の心情について話し合おう。

(3) 直実が、「泣く泣く首をぞかいてんげる。」(P 130 L 4)という行動をとった時の心情を考えよう。

自分の考えを伝え合おう

3 当時の武士の生き方や価値観について考えたことを話し合おう。

4 登場人物や語り手などの役割を決め、朗読しよう。

振り返り

- 歴史的仮名遣いに注意しながら、作品の特徴を生かして朗読し、物語に親しんでいるか。
- 当時の武士の生き方や価値観について理解しているか。

この教材で学ぶ漢字

124 没 ボツ 日没

124 鐘 シヨウ 警鐘
かね 鐘の音

124 双 ソウ 双眼鏡
ふた 双葉

124 衰 スイ 衰弱
おとろえる 体力の衰え

124 滅 メツ 絶滅
ほろびる 国を滅ぼす

126 陣 ジン 陣地

127 粧 シヨウ 雪化粧

128 騎 キ 騎兵戦

130 錦 キン 錦秋
にしき 錦絵

新出音訓

127 化粧 ケ

127 敵 かたき

128 討つ うつつ

131 発心 ホツ

歴史的仮名遣い

① 語中・語尾の「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」

↓「ワ」「イ」「ウ」「エ」「オ」と発音

例 あはれ↓アワレ

思ひ↓オモイ 思ふ↓オモウ

ひとへ↓ヒトエ いとほし↓イトオシ

② 次のような「む」「なむ」↓「ン」「ナン」と発音

例 戦はむ↓タタカワン 竹なむ↓タケナン

③ 次のような母音ほんの連続は伸ばす音に

「ア段」+「う・ふ」↓「オ段」の長音 (au→o)

「イ段」+「う・ふ」↓「ユウ・オユウ」 (iu→yo)

「エ段」+「う・ふ」↓「オヨウ」 (eu→yo)

例 らうたし↓ロウタシ

うつくしうて↓ウツクシウテ

てふてふ↓チヨウチヨウ

④ 「ゐ」「ゑ」「を」↓「イ」「エ」「オ」と発音

例 みなか↓イナカ こゑ↓コエ

をかし↓オカシ

⑤ 「ぢ」「づ」↓「ジ」「ズ」と発音

例 なんぢ↓ナンジ よろづ↓ヨロズ

⑥ 「くわ」「ぐわ」↓「カ」「ガ」と発音

例 くわんげん↓カンゲン (管絃)

ぐわんじつ↓ガンジツ (元日)

係り結び

『敦盛の最期』には、次の表現があります。

笛をぞ、腰にさされたる。(P 130 L 9)

これは、

笛を、腰にさされたり。

を強調した表現です。

「ぞ」によって「笛を」が強調されています。このような助詞と文末の結びつきの関係を係り結びといい、この「ぞ」のような助詞を係りの助詞といいます。

係りの助詞が用いられると、文末が変わるのが特徴です。

例文では、「たり」が「たる」に変わっています。

係りの助詞には、他に「なむ」「こそ」(前の語を強調する)、「や」「か」(疑問などを表す)などがあります。

